ハインリヒ・マンの歴史小説『アンリ四世』について

山口　裕

はじめに

ハインリヒ・マンの長編小説『アンリ四世の青春』（一九三五年）と『アンリ四世の完成』（一九三八年）は、（それぞれ『青春』、『完成』と略称します）、この作家の最高傑作と言われ、また発表当時から有名だったものであり、かつ現在の東西ドイツではかなり読まれてもいながら、その批評、研究の歴史は、すこぶる不幸なものでした。その原因としては、なによりも戦後の両ドイツのイデオロギーの対立がこの作家の評価に直接影響したことをあげねばなりません。東では、この長編小説よりは、同じ時期に彼がファシズムに抵抗した活発な発言、とりわけ人民戦線運動で果たした役割が興味の対象となり、小説自体を考察する際にも、主人公であるフランス王の闘いを、抵抗活動の小説化、つまり三十年代の状況下でのアクチュアルな政治小説ととらえるために、小説の独自の世界、独自の論理の解明が進まず、議論は進展を見ないままにとどまっております。東で見られるもう一つの傾向は、作家に革命への共感、ソビエト体制讃美が見られるのだと過度に強調する結果、『臣下』

（一九一四年）、『ゾラ論』（一九一五年）より前で世紀末ごろから後に書かれている多彩な作品群がほとんど考慮されないこととなり、『アンリ四世』を作家の内的発展の結果と見る視点が欠落していることです。

逆に、西ドイツでは、東側の解釈への過剰なまでの反感から、作家が行動主義を唱え、民主主義に共感し、ドイツ風刺を行いはじめた時期以後の作品はすべて二流のものであって、一九一〇年ごろまでに彼の傑作は出つくしたとする見方が優勢でしたから、『アンリ四世』に関しても、きびしい否定論が目立ちます。それらの論議に見られる共通の特徴は、作品そのものの構造分析や解釈を最初から一方的に拒否してかかる姿勢だと言えます。アクチュアルな政治小説だとして、そこに具体的な展望が欠けていることを論証するために、同じ時期の彼のエッセイだけを仔細に分析する、歴史小説として重大な欠点があるとして、作者が史実を改変した個所だけをさがして、作品の中で果たしている機能は問わずにただ羅列する、といった作品不在の作品論がまかり通る傾向があります。独立した一個の小説としての価値を見きわめ、位置づけを試みるという態度は、すでに作者へのなにがしかの共感を前提にしないとおそらく不可能なのでしょう。

小説が発表された当時の亡命文学者たちの批評以後に、論じるに足る作品解釈が現れはじめたのは、作家の生誕百年目の一九七一年以後のこととみなしてよく、その数は今なお少く、一方には極端な否定論があって、評価は分かれたままの状態です。

研究、解釈上の問題点についてはのちにあらためてふれることとして、この小説には、長大であることと、難解な文章で書かれていることのほかにも、なお近づきがたい障壁があります。すなわち、ここで語られている十六、七世紀のフランスの、宗教戦争から絶対主義国家誕生にいたる時代の歴史は、たんに日本のゲルマニストに

とってだけではなく、ひろく日本の読者一般に馴染みのうすいものですが、作者は、読者のくわしい知識を自明の前提として物語を展開しております。また、『青春』の邦訳がすでに出ているとは言っても、ドイツでの研究事情を反映して、この歴史小説が我が国の読書界あるいは研究者間の話題にのぼることは、今なおまれなことだと言わざるをえないようです。

以下に『アンリ四世』を歴史小説の側面から考察するにあたって、背景の時代と小説のあらすじについて少からぬ分量の解説と紹介をまじえたのは、右の事情を考慮したからにほかなりません。

背景の時代

小説は、ブルボン王朝を興したフランス王アンリ四世（王位につくまではアンリ・ド・ナヴァル）の四才のときから、一六一〇年五十六才で暗殺されるまでの生涯を描くという形をとっております。

歴史上のアンリ四世は、三十六年にわたって断続した宗教戦争を収拾して、「ナントの勅令」を発し、カトリック、ユグノー両宗派に寛容をもって接したこと、外国勢力の干渉を排して、産業を興し、フランスを強力な統一国家とし、ルイ十四世にいたるフランス絶対主義の基礎を築いたことで知られている人物です。この王は、平和を招来し、庶民の味方であったということで「よい王様アンリ」と語り伝えられて、フランス歴代の王のなかで最も人気があると言われており、ハインリヒ・マンは、この王が人間愛の精神を実現したとして、その生涯に託して、自分自身の年来の理想を語っております。また、この作品は、宗教戦争の狂信や野蛮と戦う「戦闘的ヒューマニズム」を描くことで作者自身の信条告白ともなっていますので、歴史小説の形をとった抵抗文学だと従

来見られてきました。一九三五年に『青春』がオランダの亡命出版社クヴェーリドー書店から出たとき大きな反響を呼びましたが、多くの亡命者たちはこのとき、主人公のアンリが歴史上有名な聖バルトロメオの虐殺とそれにつづくルーヴル宮殿幽囚の苦しみをなめたのちパリを脱出して、ユグノーの軍を率いて信教の自由を要求して戦う姿に、自分たちがナチスの暴虐に苦しみ自由をもとめる姿を重ね合わせて見て、拍手を送ったようです。しかし、『完成』の方は、そういう勇ましいところがありませんので、発表当時わずかにフォイヒトヴァンガーとヘルマン・ケステンの二人が好意的な批評をしたのみにとどまりました。この反応の違いは、あとで述べるとおり、現在にいたるまでつづいていて、小説の分析、評価に影響しております。

一五五三年生まれのアンリが幼いころのフランス王は、ヴァロア朝のアンリ二世で、この王の先代のフランソア一世は、神聖ローマ皇帝カール五世とイタリア戦争を戦って敗れ、北イタリアのパヴィアで捕虜になったことで有名で、これ以来フランスは国際的な発言権を失いますが、国内ではルネッサンス文化の花を咲かせた進取の気象に富む君主だったようです。一方、南西フランスのナヴァル王国を領するブルボン家は、アンリの祖母マルグリットがヴァロア家の出で、フランソア一世の実の姉で、父方も遠縁ながらヴァロア家とは血縁関係にあり、もしフランス王アンリ二世が死んで、彼とその后カトリーヌ・ド・メディチとの間に生まれた四人の王子が死に絶えることがあれば、アンリが王になれるわけで、これは実際のちに、王たちがつぎつぎに若死にし、一人は暗殺されたために実現することになります。そのヴァロア家では王アンリ二世が、一五五九年アンリ六才のとき、馬上の槍の試合中に負傷して急死し（享年四十才）、十五才のフランソア二世が即位して二年足らずで病死し、（その后がメアリ・スチュアートで、王の歿後英国へ帰る）、ついでシャルル九世が十才で即位すると、太后カト

リーヌ・ド・メディチが摂政となって実権を握ります。その間母のジャンヌ・ダルブレは、アンリが七才のとき新教に改宗して、わが子を新教徒として教育しはじめますが、その一年後には第一次宗教戦争が起こって、以後和約と新たな戦争が何度もくり返されて、外国の傭兵に国土をじゅうりんされ、同胞相搏つ悲惨な戦いに国力は衰え、のちにこの対立抗争を最終的に収拾して、ナヴァル王国をも含めたフランスを統一する仕事を、四十才に近づいたアンリ四世がなしとげることになります。なお、アンリの父アントアーヌ・ド・ブルボンは、国王の将軍として、ナヴァル王国を離れてルーヴル宮殿に住みつき、宗教戦争の渦中で国王軍の指揮をとっていて、第一次宗教戦争のはじまった年に戦死してしまいます。

『アンリ四世の青春』とはどのような小説か

『青春』は、アンリが四才のときからはじまって、やがてこの内乱のなかで新教徒軍の総帥となり、最後に王位継承権を獲得し、旧教徒軍と戦ういわば天王山の戦いであったアルクの戦い（一五八九年）に勝った三十五才の秋までの物語です。小説では、主人公がユグノーとして自由と平等をもとめて戦ううちに、やがて自分の使命、すなわち分裂を回避して、フランスを強力な国家とすることによって平和を維持するという使命を自覚して、行動するにいたる過程として物語られております。

さて、ヴァロア家の側で太后がとった政策の基本は、対外的にはスペイン、オーストリア、ローマ法王などとむすんで自家の安泰をはかることで、とくにハプスブルク家の両帝国は終生アンリの敵となりますが、太后は、国内で勢力をのばしてきたギーズ家を押さえるために、いったん宗教戦争を休戦してユグノーであるブルボン家

に接近して、娘のマルグリット・ド・ヴァロア（『七日物語（エプタメロン）』の作者であるアンリの祖母と同名、通称をマルゴ、のちマルゴ公妃）とアンリを結婚させます。ギーズ家も、ヴァロア家につながる名門で、当主のアンリ・ド・ギーズは、メアリ・スチュアートの甥にあたります。ところが、王シャルル九世がユグノー軍のコリニー提督の感化を受けてフランドル駐留のスペイン軍を討つ出兵計画に賛成し、アンリに従って来たパリ駐留軍の勢力が強まるのを見た太后は、急拠方針を変更して、無力な若い王を説得し、ギーズ家とむすんでコリニー提督殺害を皮切りに、「聖バルトロメオの虐殺」に踏み切り、数千のユグノーが殺されます。この時、知らせを聞いて喜んだ法王は、祝賀の花火をあげさせたと言われています。

『青春』では、マルゴとの結婚と、そのわずか五日後にはじまった虐殺が全体のクライマックスになっていて、そのあとアンリは、ルーヴル宮殿に軟禁されて、敵のただ中で生きながらえるためにカトリックに改宗し、三年半後にようやく脱出に成功します。

脱出後のアンリは、新教徒軍の旗頭として南西フランスに勢力を張り、ギーズ家の当主アンリ・ド・ギーズは、「神聖同盟（ラ・リーグ）」と称するカトリック護持を名目とする結社をつくってパリを制圧し、シャルル九世が病死したあと王位にのぼったアンリ三世は、その圧迫に堪えかねて「バリケードの日」にアンリ・ド・ナヴァルを頼ってパリから逃げ出します。これが、いわゆる「三アンリの戦い」ですが、やがて、アンリ・ド・ギーズは王アンリ三世の命令を受けた家臣たちに王の面前で暗殺され、まもなく太后カトリーヌがそのショックから立ちなおらないままに歿し、王自身も神聖同盟派の修道士の手にかかって果て、もう一人のヴァロア家の男子であった王弟ダンジューはすでに病死していましたので、男系最近親の男子が王位につくという「サリカ法」の規定によって、傍系

であったアンリ・ド・ナヴァルがひとり生き残って、王位継承権を得ます。

ここでさしあたって大ざっぱに要約しますと、太后カトリーヌ、アンリ・ド・ギーズ、その背後の大物フェリペ二世などの人物は、民衆の幸福を願い自由と人間愛の精神を標榜するアンリに敵対する悪の原理の側に属するとみなされ、彼らを打ち破るためには、アンリは、ただ理念を掲げるだけでなく、武力を用いて戦わねばならないというわけで、ここに「戦闘的ヒューマニズム」というテーマが現れます。そして、アンリに使命を自覚させる人物は、有名な人文学者モンテーニュです。

アンリが最初にモンテーニュに出会うのは、ルーヴル宮殿に囚われていた時期のことで、この時の王子は、デンマークの王子ハムレットと同じ悩みに直面しています。母のジャンヌ・ダルブレは、十九才のアンリが結婚式のためにユグノーの軍勢を従えてパリ入りする直前にルーヴルで急死して、太后カトリーヌが毒殺したと登場人物みんなが信じておりますし、父ともたのんだコリニー提督も大勢の家臣もろとも殺されてしまって、王子は、敵のまっただ中で本心を覚られぬよう邪気のない愚か者を装って、人間を見る眼を養い、時節を待ちます。つまり、正しい目的は仮面という手段を正当化するというわけですが、一方あまりに多くのことを知りすぎ、考えすぎたために行動の力が萎えてしまって、逡巡し、絶望を感じています。そうした彼の前にコリニー提督の亡霊まで都合よく現れるところなど（これは、実はアンリを陥れようとする陰謀なのですが）、まったく『ハムレット』とそっくりです。

すなわち、母のジャンヌが身をもって示した教え、つまり弾圧に屈せず勇敢に信念を主張するという態度は、たしかに自由をもとめ正義を主張しているには違いないのですが、同時に敵を否定しきっていて偏狭な点では、

やはり党派の利害のみにこだわる段階にとどまっていて、敵側の態度と結果において大差なく、党派間の憎悪を越える視点がないので、アンリの矛盾は解決できないということになっています。

モンテーニュは、そんな彼に対して、宗教戦争の愚かしさと空しさに眼を開かせ、有名な「ク　セ　ジュ」という言葉で懐疑と寛容の精神を教え、キケロの言葉 Nihil est tam populare quam bonitas.（善意ほどに人心を収攬しうるものはなにもない）を引いて、憎悪ではなく人間愛こそがこの場合有効であると説き、攻撃する前に敬虔に神に祈る軍隊というイメージで、行動するユマニストについて語ります。

この教えに接して、アンリは、知識と行動の矛盾を断ち切ることができます。彼のその後の行動は、デンマークの王子と違って復讐ではなく、また党派の利害を動機とするものでもありません。モンテーニュの教育は、アンリがルーヴルを脱走してからも行われ、理性を失っている時代にあって節度と懐疑の念をもって行動するようにと、王子は教えられます。その後のアンリは、態度決定を迫られる場面でしばしば師の言葉をくり返し、師の教えを守って行動することになります。

なお、実在のアンリ四世とモンテーニュとの間に親交がむすばれたのは、アンリがルーヴルを脱出した二年後の一五七七年にモンテーニュがナヴァル王室侍従武官に任命されたころからのことのようです。この哲人は、王子に、近い将来彼が果たすべき使命のために耽溺の生活をやめるように諫めたと言うことで、この臣下の忠誠と、両者共通の友人であった「うるわしのコリザンド」と呼ばれたグラモン公爵夫人の愛情が、粗暴で人間不信に陥り、あくなき復讐に走りがちであったそのころの王子に、偉大な帝王となる素質を徐々に開花させるにいたった事実は、たしかにあったようです。ただし、ルーヴル幽囚当時のアンリがユグノーを攻撃する国王軍に加わらさ

れ、従軍のさなかに海辺でモンテーニュと出会い教えを受けるというのは、おそらく脱出後の、新教徒軍を率いてからの行動をはじめから正義の戦いとして描く必要があったからでしょうか、作者の完全なフィクションです。

しかし、二人の世界観から見て、また、太后、アンリ三世らにも重用され、アンリ・ド・ギーズのこともよく知っていて、再三紛争の調停役をつとめたというモンテーニュの立場から見て、このような形で師弟の関係を設定することに大きな不自然さは感じられません。のみならず、作者は、モンテーニュの『エセー』を援用しながら随所に美しい効果をあげることに成功しています。

ルカーチの『歴史小説論』とH・コープマンの論文

さて、以上のような内容の『青春』を分析することによって『完成』をも含めた小説全体を論評している論文のなかからその代表的なものを二つここで紹介して、この小説を解釈する上での問題点を明らかにしたいと思います。これらの議論には、暗黙のうちに『青春』の方が重要で、『完成』は問題の乏しい続篇だとする見方が共通の前提となっているようで、わたしはそういった見解には反対ですが、そのことにはあとでふれます。

まず、はじめにルカーチの『歴史小説論』を簡単に検討しておかねばなりません。[1] ルカーチは、この小説を反ナチスの抵抗小説だと規定します。アンリ四世という人物はヒトラー総統に対比された肯定的人物だというわけです。ところで、ルカーチには、ウォルター・スコットの歴史小説を分析して得た一つのテーゼがあって、このテーゼによって、『アンリ四世』には、歴史小説として大きな欠陥があると批判します。歴史小説の主人公は、かならず凡庸な人物でなければならず、歴史上有名な人物は脇役にとどまらねばならないというのがそのテーゼ

で、そうした構造をとることによってのみその時代の階級対立と民衆の具体的な動きが描けるのだ、と彼は主張します。ルカーチにとっては、リアリズムの手法でその時代の民衆を描写する形で階級闘争を描くことが、歴史小説の唯一の目的ですから、『アンリ四世』の場合は、英雄を主人公にしているために、その英雄をロマンティックに「記念碑化」したとして、斥けております。王を主人公に据えたために、歴史を前進させた具体的な闘争が抽象的で非歴史的な性格を帯びて、善悪の原理の対立といったようなものになってしまい、民衆は背景の役割にとどめられて、アンリ個人の天才が時代を動かしたかのように見え、歴史は現代の問題をあらわす比喩にとどまっているというのです。ルカーチにとって、歴史小説が現代の問題の比喩であることは、彼にとっての規範であるスコットの小説の原理から見れば許しがたい頽廃を意味しています。この現象の根底には必ず、前途に希望を見出せなくなったブルジョアの健康な歴史感覚の衰弱がある、と彼は言います。ただ、この基本テーゼは、小説の分析による立証ができていませんので、一つの主張にとどまっています。

小説が王の伝記という形をとったことについて、彼は、そのために歴史上有名な敵役たちが必然的に生きた人物になっていないと言います。神聖同盟の盟主ギーズ公は、ヒトラーの戯画に過ぎないために、歴史の枠から完全にはみ出しているし、カトリーヌ・ド・メディチは、ギーズ公らの勢力を抑えて、フランスを絶対主義国家として統一しょうと意図した点では、アンリ四世の先駆者であって、当時の進歩的な勢力に属していたのに、ハインリヒ・マンは彼女を単純に魔女にしてしまったというのです。

さて、『青春』に、露骨にナチスを戯画化した個所がいくつかあって、小説の歴史的背景と調和がとれていないことは、これまでの『アンリ四世』論で必ず言われております。ギーズ公がヒトラーをあらわし、神聖同盟の

ために弁じたててアンリを口汚く攻撃した説教師ブーシェが宣伝相ゲッベルスを指すといった風に対照表が作れるといったことなどはまったくそのとおりで、小説の発表当時すでにルカーチに先んじて批評家たちが（つまりほとんどが亡命文学者ですが）作品の惜しむべき欠点だと指摘しました。しかし、この小説が反ナチスだけを意図して書かれたのではないことも、またはっきりしています。くわしいことは、次に紹介する論文との関連で申しますが、直接ナチスを風刺するという要素は、当初の計画にはなかったのが、故国を追われた亡命者の怒りが筆を走らせたという性質のものだと解釈されるべきものです。しかし、作者が『青春』でナチスを風刺したことが、『完成』をも含めた小説全体の性格をルカーチ以外の人からも誤解される原因になって今日にいたっています。

『青春』には、ナチス風刺の関係で、登場人物が単純に善玉と悪玉に分けられたような傾向がありますので、ルカーチの批判は、小説の構造上の弱点を正確についているように見えます。そうだとすれば、カトリーヌ・ド・メディチが魔女扱いされていることなどは、作者の歴史観がお粗末だった証拠ということになってしまいます。

ここでは、ルカーチを論評するかわりに、まったく対照的な結論を出している、つまり『アンリ四世』を現代小説と見る立場をとった研究の代表的なものの一つである、ヘルムート・コープマンの『善良な王と邪悪な妖精』[2]と題する論文を紹介しておきます。ここでは、結論を要約するだけにとどめますが、「邪悪な妖精」die böse Fee といいますのは、太后カトリーヌのことで、婚礼のためにルーヴル宮殿に着いた若いアンリが、母を毒殺した張本人だと思いこんでいる彼女とはじめて対決する一節がこう名づけられています。コープマンは、この個所のほかにも、童話的表現があったり、登場人物を神話の神々にたとえたりしている部分を考察して、この小

説の性格は元来歴史小説ではなくて、むしろ現代小説であるという結論をひきだしています。歴史小説でないという意味は、歴史時代の正確な再現、描写が本来の目的ではなくて、歴史が現代の問題の比喩に使われているという意味で、彼によれば、王を現実の政治家であり軍人であった歴史上の王よりも善良な人物にしたて、太后カトリーヌをこれも現実の政治家としての彼女を再現せずに妖精にしているのは、ルカーチが主張したように、小説が偉人の伝記の形をとったために必然的にあらわになった構造上の欠陥とか、作者の歴史認識の至らなさの結果なのではなくて、まさにこれこそが最初からハインリヒ・マンの意図したところなのだというのです。コープマンは、元来この小説には三つの異った層、ないし次元があって、まず第一に目につく歴史上の事件を描いた「歴史的な層」の上に、ナチスやヒトラーなどを暗示したりした「現代の事件の層」が重なっていて、現代小説の性格をそなえているのであるが、さらにその上に第三の層、すなわち「神話的＝童話的＝宗教的な層」があって、そのために現代の直接の風刺といった性格が和らげられて、一回きりの歴史的な事件が何回もくり返されうる Urbild の性格を帯び、このようにして重層的な比喩の構造がうまく機能して、小説を傑作にしているのだと説いています。

コープマンに従うなら、この小説は、ルカーチが定義した意味での歴史小説ではなくて、現代の比喩が意図されているのですから、ルカーチの非難は小説の性格を見誤った結果だということになります。それならば、登場人物を悪玉にしたてることも、史実を極端でない程度に変えることも、比喩を意図しているのですから、許されるということになり、歴史小説として不正確だという非難への有力な反論となっています。現代の比喩ととる見方は、七十年代になってから出たものですが[3]、歴史小説とする説をしのぎはじめています。小説を検討してみま

すと、どうも比喩ととる方が妥当なようです。なぜなら、もしそうでないとすると、ヴァロア家、ギーズ家、ブルボン家が生き残るためにしのぎを削り、さらにスペイン、オーストリア、イギリス、新教諸国などがそれぞれの国家理性の命ずるままに長い歳月にわたる背景をもつ利害関係にもとづいて行動している国際政治の舞台で、かりに実在のアンリ四世個人がヒューマニスティックな理念の持ち主であったにしても、彼に「理性と人間の幸福のための使者[4]」の役をあて、彼と同盟関係にあったエリザベス女王も自由の擁護者の役をふられ、これに対して太后カトリーヌやギーズ家の人びとやフェリペ二世が自由を抑圧し、人間の幸福を圧殺する敵役にされた構造は、作者が素朴にも現実の政治の問題を理念の問題ととりちがえたからなのだということになってしまいます。しかし、あとで見ますように、ハインリヒ・マンの他の作品と比較すれば容易に分かることですが、彼はそんな幼稚な誤りを犯しているわけではありません。自由と平等のために反動的イデオロギーと戦うというのが、一九一〇年ごろ以後、ワイマル共和国時代、亡命時代を通じて彼の一貫した姿勢だったわけですから、彼は歴史上のアンリ四世と敵役たちとの戦いを、自分が参加している戦いを表現する適切な比喩とみたのです。ハインリヒ・マンがこの小説を最初に構想したのは、一九二五年南フランスのポーに残るアンリ四世の居城を訪ねた時のこととされています。この事実は、同じく比喩と言っても敵役の側が第三帝国だけをあらわす、さらに反ナチスを主題とした抵抗小説ないし政治小説であるという風に、狭く解釈する必要がないことを示しています。

ポー訪問と同じ一九二五年に発表された長篇『頭』（『帝国』三部作の第三部）と比較して見ると、このことはいっそうはっきりします。『頭』の背景の時代は、一八九〇年から一九一七年まで、つまりヴィルヘルム二世治下のドイツ帝国で、皇帝自身のほかに、帝国宰相ビューローとティルピッツをモデルにした人物も登場しま

す。主人公のテラは、極端な理想主義者で、帝国の体制を批判しますが、代議士となった彼のいろいろな活動はすべて実を結ばず、破局へむかって進む帝国の現実をなんら変えることができず、絶望して最後に自殺します。いま一人の主人公でテラの友人のマンゴルフは、体制に順応して権力欲をみたす道を選び、宰相にまでなりますが、その先には挫折と死が待っています。そして、この二人の行動を軸にして、戦争に突入していったドイツ帝国の上層部の動きが描き出されます。すなわち、ナチスのみに限らず、専制または反動勢力が支配的な社会――この小説ではドイツ帝国――に批評的な知性を対置して、体制が行う巨大な悪を剔抉させ、悪と戦う行動をとらせるという『青春』と共通の構造を『頭』はすでにもっているのです。ただ、そこでは、彼がエッセイ集『精神と行動』『権力と人間』などで讃えたヴォルテールやゾラたちの場合と違って、「精神」はあまりにも内面的な存在であって、有効な「行動」に出ることができず、帝国の現実と対決して敗北するほかはありません。一九二五年にハインリヒ・マンがフランス王アンリ四世という素材に出会ったとき（それ以前にヴォルテールの叙事詩『アンリアード』を通じてこの王のことは知っていたと思われますが）彼が感激したのは、現実を踏まえて理想を実現する、つまり現実を望ましい方向に変えてゆく行動的な人物を小説化できる可能性をはじめて見出したからだと思われます。王アンリ四世の戦いを、ナチスをも含めた現代の反動勢力との戦いのアナロジーとみなす――この構造の小説を亡命の地で執筆していて、ナチスへの怒りがつい筆を走らせるということは、ある程度避けられなかったのだと言うほかはないようです。

ただし、現代の問題の比喩であって、歴史の再現そのものがこの小説の目的でないとはいっても、比喩が有効に機能するためには、対象となっている時代の雰囲気が再現されなければならないのは、自明のことです。歴史

小説の形をとった大衆小説によくあるように、歴史上の人物が現代人の心理をもたされたりして、時代の特質が描かれていないなら、比喩の構造は読者に対する説得力を失うはずです。この小説を現代の比喩と見る議論をする人たちは、コープマンが用いた「現代小説」という言葉が示しているように、主題と比喩の構造を分析しようと熱心なあまり、歴史小説でもある側面を無視する傾向があります。コープマンが「現代の事件」と言うとき、主として第三帝国の暴力を指していますが、作中で歴史上の事件とナチスのひきおこす事件の対応関係があらわになっている部分は、やはりルカーチらが指摘したように、むしろ作品の統一を損う要素になっていると考える方が妥当なようです。この小説は神話的構造をもつことによって歴史上の事件をUrbild の域に高めたから成功しているのではなくて、歴史描写が小説を成功させたと言うべきであろうと思います。彼が、この小説を現代の比喩と規定してルカーチとは違う立場から出発しながら、現代の事件とはナチス支配下のドイツの現実を指すとみなすことによって、結局反ナチス小説と見たルカーチと同じく、小説を解釈する幅を狭めてしまっているのです。その証拠に、彼の説では『青春』の構造はなんとか説明できても、ルカーチと同じく、『完成』には手がつけられません。ナチスの風刺がなくなったことが『完成』の『青春』と違う特徴の一つですから、王の理想はあい変らず描かれますが、コープマンが言う意味での「現代の事件」に相当するものがなくなっています。彼は、ルカーチと違って自己のテーゼのために『完成』を無視してはいませんが、『青春』にとくに三層の構造が顕著に見られると言うだけで筆をおいてしまいます。

『アンリ四世』は、やはり歴史小説でもあるのです。ハインリヒ・マンは、スコットの方法、つまり民衆を描く方法にはよらなかったにしても、やはりフランスの宗教戦争から国家統一の時代の雰囲気を再現しており、描

写の成功が比喩の信憑性を保証しているのです。作者が歴史的事件や人物について読者の知識を前提にしてほどこす解釈や描写を、いちいち現代に関連づけずに理解する態度も必要なのです。

『アンリ四世の完成』の問題点とケステンの批評

『青春』を運命の提示と主人公が運命を自覚する過程であったと要約するなら、『完成』では、題名が示しているとおり、運命の実現する過程が書かれています。ここでは、アンリ四世が王としてなしとげた歴史上有名な業績のいくつかは目につきますが、虐殺のような劇的な大事件は、最後の、王の暗殺のほかはありませんし、王の生涯を中心に見ていくかぎり、物語の要約はヤマ場が乏しく、簡単にすんでしまいそうです。ここでは、国家統一が進行した時期である王の後半生と王をめぐるさまざまなエピソードが、語られています。アンリは、旧教徒軍を各地に撃破して国内の平定を一応終え、王位を目前にすると、一世一代の大ばくちとも言うべき、いわゆる「とんぼ返り」と称するカトリックへの改宗を行います。これによって、味方のユグノーを敵にまわす危険を冒して国内のカトリックの支持をとりつけ、国外のローマ法王、スペインなどの反対や干渉の口実をも封じます。彼は、この時を最後に、生涯に六回改宗していますから、この時代の異常さがわかります。やがて彼は、パリへの無血入城を果たし（一五九四年）、十八年ぶりにルーヴル宮殿入りし、四年後には旧新両教徒への寛容をうたった「ナントの勅令」を発布し、宗教戦争は最終的な収束を見ます。ただし、諸勢力の抵抗が大きくて、すぐには実効を伴わなかったことも描写されています。王は、宗派を問わず、また国王軍や神聖同盟に所属して敵対したものも味方に加えて、有能なロニー（のちシュリー公）と協力して対スペイン戦争に勝ち、長い戦乱で衰えた

産業を復興し、カナダに植民者を送りこみ、フランスは平和を楽しみながら再びヨーロッパの強国となってゆきます。この間一五九〇年ごろから小貴族出身のガブリエル・デストレを愛して、三児を生んだ彼女を王妃に据えようとしますが、内外の、また上下の、抵抗が強くて、実現できないうちに九九年彼女が急死する事件は、王の生涯の大きなエピソードの一つで、小説ではこれが延々と物語られていて、王が理想実現をめざして行動するという本筋をしのぐほどです。翌一六〇〇年マルゴ公妃との離婚が正式に、つまり法王に承認されて、成立して、マリ・ド・メディチとの政略結婚が行われ（アンリ四十六才、マリ二十七才）、世継ぎのルイ十三世が生まれて王朝の基礎は固まりますが、この王妃は、外国勢力と通じてアンリ四世の政策に半ば公然と敵対行動をとりますし、諸侯やプロテスタントの反乱、さらに王暗殺の試みなどが続発し、股肱の臣や愛人が反乱に加担したりして、晩年になっても王の周辺は多難です。

最後に、王は、両ハプスブルク家の勢力に対抗する一種の国際連合組織を構想した「大計画（グランデッサン）」と称する理想を実現しょうとして、対ハプスブルク戦争を準備しますが、出陣の直前に狂信的なカトリック教徒フランソア・ラヴァイヤックによって、志を果たさぬうちに暗殺されて、小説は終わります。この「大計画」は、実際は、王の片腕となって財政、軍事の両面にわたって功績をあげたシュリー公がユグノー特有の理想主義から構想したもので、王自身がこの計画にそれほど乗り気だったわけではないらしいのですが、史実に若干の改変をほどこすことによって、王は理想化されています。作者のハインリヒ・マンが二十年代後半ごろから国際連盟の活躍を熱心に支持していたことは、有名な事実で、王はここでも作者の分身の性格をもたされています。

ここで、『完成』の主題と構造をまとめますと、王の生涯を、作者は、ユマニストである王が理性を信じて行

動し、平和、自由、人間愛の精神を、一回きりではあったにせよ、この地上に実現していった戦いの生涯であると解釈しており、従って、この小説は、『青春』で提示された理想が実現してゆく過程を描いている――これが現在妥当と見られている解釈です。たとえば、もっとも支持されることが多い、ハノー・ケーニヒは、「理性のユートピアの実現」が中心テーマだとしています[5]。この解釈に大きな誤りはありません。しかし、難点は、小説のより複雑な構造が説明できていないことです。たしかに、王の足どりは、全篇をつらぬくたて糸のように描かれてはいるのですが、一方それを阻止しようとする勢力の動きや王の理想と直接関係がなく見えるエピソードなどの描写が、とくに『完成』では尨大で、王の妥協や挫折さえいくつも描かれている事実が、この解釈では視野に入ってこないのです。反対勢力の動き一つをとっても、それが中心にいる王に現実感を与えたり、引きたてる効果をあげるための描写だとかたづけてしまうには、分量が多く、しばしば王の行動を離れて独立の意味を持たされています。

『青春』では、理想に燃える青年王が旧教徒軍と死闘をくり返しましたが、彼が王位につき、神聖同盟が消滅してしまうと、国内では正面切って敵対する者はいなくなります。しかし、敵対行動そのものはいっこうに衰えず、地下に潜行して、反乱の陰謀や暗殺の試みが頻発します。そして、暗躍する策謀家の背後には、時によって異同はあるものの、イエズス会、国内の諸侯、プロテスタント、メディチ家、法王、スペインなどの勢力が控えています。ですから、この小説を、実際に権力を握り、善政を施しながら一つずつ障害を排除してゆく王を中心に見るだけならば、退屈なまでに起伏に乏しくなってしまいます。『完成』が、すでに述べたように、とかく『青春』のより退屈な続篇と見られがちで、くわしい解釈の対象になることが少い理由は、このへんにあると言えま

す。

そこで、反対勢力の動きやエピソードにも目配りを忘れていない作品論をさがしてみますと、ヘルマン・ケステンが一九三九年『完成』が出た直後に亡命雑誌「尺度と価値（マース ウント グェールト）」に発表した『ハインリヒ・マンと彼の〈アンリ四世〉』[6]と題する評論が見つかります。これは、トーマス・マンが「ポジティヴな批評の模範的な例[7]」と激賞しているものですが、直観に頼っていて方法が学問的でないことと、細部に目をむける姿勢をとっていて、テーマや小説の性格は二の次としているために、研究者たちからはルカーチほど重視されておりません。現に、コープマンの論文では、作品の本質に迫りえない空しい論議の一例として引き合いに出されています。しかし、コープマンもまた行きづまってしまったのですから、もう一度ケステンの主張を検討することは許される試みのようです。

ケステンは、『青春』と『完成』の広大な世界の多彩な魅力を讃えることに終始して、現代の政治との関連など問題にもしておりません。聖バルトロメオの虐殺後のアンリがハムレット的状況におかれていると最初に指摘したのも彼です。小説の構造に関しては、彼も歴史小説ではないとしていますが、ここで注目すべきは、彼が教養小説、陰謀小説（Intrigenroman 耳なれない定義ですが、シラーの『招霊妖術師』を例にあげています）、愛の小説（Liebesroman）の三つの定義があてはまるとしていることです。第一の教養小説に関しては、すでに発表当初から多くの批評家が教養小説または教育小説と定義しており、アンリが王と呼ぶにふさわしい王へと成長してゆく過程であると解釈すればあたっておりますが、『完成』になると教養小説の要素は少くなっています。問題は、陰謀小説と愛の小説で、ここに小説全体の構造を説明できる鍵があると思われるのですが、ケステンは

言いっぱなしでなんにも証拠をあげておりませんし、これまでのところこの視点から小説を分析する試みは行われておりません。従来、陰謀も愛も王をめぐる副次的なエピソードととらえられていて、作品の中で果たしている有機的な機能は問題にされておりません。陰謀と愛が小説の中でどんな役割を果たしているかを調べてゆけば、歴史小説か否かという問題にも解答が得られるはずです。

陰謀小説か

フランスを舞台に国際的な利害がからむ権力争奪戦が行われていて、しかも背景がルネッサンス時代ですから、アンリ四世の周辺には実際に陰険な策謀が絶えず渦巻いていたわけで、一例をあげれば、暗殺計画は最後に成功するまでに四十四回あったと言われ、ハインリヒ・マンは、『青春』と『完成』の全体にわたってそれらをくわしく描写していて、面白いスリルのある場面なども、いくつも出て来ます。

まず、『青春』では、陰謀をめぐらす主役は、カトリーヌ・ド・メディチで、彼女は、アンリの母ジャンヌ・ダルブレをあしらって外交上優位に立ち、のちにアンリとマルゴの結婚を実現させます。彼女が演出し、ギーズ一党が実行した聖バルトロメオの虐殺は全体を通じて最大の陰謀ですが、計画を知っている王シャルル九世や、その時点では夫のアンリを愛しているマルゴ公妃の思惑や迷いなどが描かれていて、計画がもれそうになったりして、実現にいたるまで曲折に富んでいます。太后カトリーヌの背後には、つねに法王と、カトリックの擁護者を称するスペイン王フェリペ二世、さらにオーストリアが控えています。太后が老いこんでからは、アンリ三世がアンリ・ド・ギーズ暗殺を実現し、その後間もなく、彼自身ギーズ側に煽動された修道士の手にかかって暗殺

され、一人残ったアンリ・ド・ナヴァルの命は、スペインや神聖同盟が送る刺客につけ狙われます。その他ひそかにルーヴル脱出を企てる王子が、何回も計画に失敗し、太后カトリーヌやギーズ一味に屈従して愚か者を装った末に、見張りの網の目をかいくぐって三年半後に脱出に成功する経緯なども一種の陰謀と見てよいでしょうし、この他にも小さな陰謀はいくらでもあります。ただ、後半に入って、アンリ・ド・ギーズが神聖同盟を使って政治的野心の実現をはかる部分は、ナチスの大衆操作と直接比較されて、風刺的な意図が見えすいているために、かえって無気味さを減じています。

聖バルトロメオの虐殺のあと王子がルーヴルに捕われの身となる二つの章は、「不運の学校」「考えることの無力さ」と名づけられています。虐殺の体験も、権謀術数の渦巻くルーヴルでの捕囚の見聞も、王子に自分を待ちうける途方もなく困難な使命を自覚させ、人間を見る眼を養わせる役割を果たしています。やがて彼は、モンテーニュに出会って、人間という存在が不完全なものであること、今こそ狂信にかわる寛容が、また党派間の憎悪でなく大きな人間愛が、陰謀をめぐらして権力を奪取するのではなく人心を掌握した正義が勝つことが必要であること、そのためには自ら剣をとらねばならぬことを納得させられます。ほかならぬ陰謀によって、彼は、教育されるのです。

ハインリヒ・マンは、世紀末前後の作品では、ニーチュなどの影響を受けてルネッサンス的悪を生命力と偉大な美のあらわれとみなして讃美して、現代はその生命力の衰えた頽廃の時代だと考えましたし、のちにはその興味が一転して、権力衝動をみたすために陰謀をめぐらす孤独な暴君の人間的な弱さに向けられた時期があります。また、風刺小説ではグロテスクな描写を得意としました。さらに探偵小説趣味があって、一九二八年に発表

した長篇『真面目な生活』などは、殺人事件があって推理小説の一つに数えることができます。こういった事情を考えあわせますと、彼が『完成』でもさらに陰謀を描写しつづけて、それが作品を面白くする要素になっている理由がうなずけると思います。

『完成』では、王が多くの陰謀に直面して苦闘する有様が描かれます。そして、その戦いは、最後の挫折、すなわち暗殺による不慮の死と「大計画」の消滅で終わります。『青春』では、宗教戦争の中で権力側の抑圧に抗して理想の旗を掲げて、いわば攻勢に立っていたアンリは、『完成』のはじめの部分で一応の全国平定を終えてからは、理想の実現を前にして、国内の諸勢力の執拗な抵抗にあって、一転して守勢にまわらされることが多くなります。征服より統治の方がむつかしいからです。王暗殺未遂事件が何回もあり、ガブリエル・デストレがくりかえし中傷され、ついで亡きものにする計画が成功するまでの詳細が描かれます。その背後にはもちろんマリ・ド・メディチの叔父トスカナ大公（三代目）や法王やカトリック諸国がいます。王の片腕のロニーすら王とマリを結びつける交渉をしており、王は知っていながらどうすることもできません。それというのは、カトリック諸国と法王はフランスにくさびを打ちこむ必要を感じ、メディチ家も延命策の一つとしてこの結びつきを必要としていますし、一方フランス側には、この結婚がもたらす巨額の持参金で財政の窮迫を救う必要があり、また各国、とくに法王が承認する王妃によって四十才をとっくに越した王に早く世継ぎの王子をもうけさせなければならないお家の事情があるからです。王暗殺を企てる側は、王を正統と認めない理由として、王がユグノーだったということと並べて、王には私生児ばかりで嫡出の王子がないことをもあげているのです。

『青春』と違って大物の悪役が姿を消したかわりに、小物がしきりに暗躍します。王の臣下や愛人がスペイン

と内通した反乱や裏切りが相次いで起こります。そして、『完成』も終わりが近づいたころ、また一人ルネッサンス的な悪玉が堂々と登場します。政略結婚の相手で、またしてもメディチ家出身であるマリ・ド・メディチが、ルーベンスの絵そのままに大勢のイタリア人の廷臣を従えてマルセイユに上陸して、パリへ向かいます。彼女の寵臣コンチノ・コンチニとその妻レオノーラ・ガリガイがまた無気味な人物です。マリは、嫉妬の念から王を小うるさく責めたてて家庭の平和を与えなかっただけでなく、のちには王の政策に反対して、これ見よがしにスペイン側につきますし、晩年の王は、彼女とその寵臣たちに身の危険を感じて、しばしばルーヴル宮殿を離れて腹心のシュリー公のもとに外泊し、重要な国事は彼のところで相談するという有様です。マリは、皇太子ルイ十三世の摂政となる資格を得るために、王に迫って女王の戴冠式を急がせ、対オーストリア戦争出陣の予定を無理に延ばさせて、王がパリにとどまることを要求し、戴冠式の翌日町が祝賀気分にひたっていたときに王が殺されたため、当時暗殺の黒幕と疑われた人物です。小説では、実際に暗殺の謀議に加わったことになっています。コンチニ夫妻は、王の死後摂政マリのもとで外国人の身で権力を独占して国政を壟断し、かつ私腹を肥やしたために上下の恨みを買い、のちに成人したルイ十三世はコンチニ元帥を殺して政権を握ることになりますが（レオノーラは、怒ったパリの民衆によって路上で引き裂かれて、死にます）、二人ともアンリ四世には、底の知れぬ怪物に見えます。

ところで、彼らが権力追求のために行った悪事は、アンリ四世の理性的な手段と対照させる意図からでしょうが、誇張されています。例をあげれば、アンリの母ジャンヌは太后カトリーヌに毒殺されたと、小説中の人物がみんな、カトリーヌの娘のマルゴにいたるまで信じており、小説の中ではその決定的な証拠は与えられていませ

んが、太后の悪玉ぶりは、毒殺があっても不思議はないと読者に思わせるように、描写されています。しかし、毒殺説は、当時から疑った人の方が多かったようです。ガブリエル・デストレの死因もそうで、たしかに毒殺説もあるのですが、真相は分からず、一つの説にとどまっていますし、王暗殺未遂事件の一つはマルゴ公妃が陰で糸を引いたことにされていますが、これにも証拠がありません。王の暗殺事件が、スペイン側と王妃マリの画策によるとされているのもそうで、暗殺者ラヴァイヤックは、当時はスペインの手先とも見られたようですが、狂信的なカトリック教徒に過ぎず、法王がないがしろにされることに憤慨したというのが凶行に出た動機だったようです。ただ、小説が採用している解釈は、定説とはなっていなくとも、いずれも典拠となる同時代人の証言のたぐいの有名なものがあって、ハインリヒ・マンは、小説の構成になるべく好都合な説をとりあげて、王が直面した同時代人の偏狭ぶりを強調しているようです。そして、それが、この小説の陰謀小説の性格を強めています。

しかし、誇張されてはいても、『完成』の悪人たちの多くは、歴史の枠からはみ出すほどではなく、王に反抗する彼らなりの理由をそれぞれ持っています。たとえば、二代目ビロン元帥の裏切りは、要職を望んで王に拒まれたのが一つの動機であり、愛人アンリエット・ダントラーグは、王が結婚の約束を守らなかった不満から、反乱にくみしますし、王妃のマリにしても、当時はそれがふつうだったとは言え、二十才年上の王との政略結婚だったところへ、王はつねにほかの愛人たちに夢中で、ルーヴル宮殿ではいわば妻妾同居の生活をさせられ、亡くなったガブリエル・デストレの遺児たちともいっしょにくらしていて、そこへ前夫人のマルゴ公妃も訪ねて来るといった風ですから、夫との生活を大事にするよりも、メディチ家のつながりを利用して、権力追求にはしったのだと言えます。ただコンチニ夫妻だけは、自分たちの権力欲と物欲から陰謀をめぐらし、これが彼らを無気味

にしています。もともと人間的動機など全然なくて陰謀をめぐらす方が典型的なルネッサンス人なのかも知れません。

このように、読者がよく知っている歴史上の人物をめぐって当然いろいろな異説があり、作者が資料を操作しながら彼らに加える解釈の面白さも、読者を惹きつけます。目的のために手段を選ばぬ彼らの偏狭さと冷酷さは、同時代人に理解されずに志半ばにして非業の死を遂げる王の悲劇を分かりやすいものにしております。『青春』では、ナチスへの露骨な風刺があったために、時代の特質とそぐわない部分が若干目についたのですが、『完成』では、マリの悪玉ぶりに誇張は見られますが、いかにもルネッサンスらしい思いきった手段に訴える敵対者たちがリアルに描かれています。ハインリヒ・マンは、決して王の理想が容易に実現したとは見ていなくて、王が出会った大小さまざまの抵抗を丹念に描いていて、ただロマンティックに「記念碑化」しているわけではありません。王は、結局暗殺されてしまうのです。しかし、ここで見方を変えれば、敵対する勢力の利害や陰謀のからみ合いの方がむしろ王個人の動きよりも生き生きと描かれていて面白い場合が一再ならずあると言えます。ルカーチは、ウォルター・スコットのように民衆を描き、組織の利害――つまり政治と経済――を描くことこそが歴史小説のとりうる唯一の道であると強調しましたが、ここでは、宮廷を舞台とした陰謀を描くことが、ルネッサンスという特殊な時代を再現する有効な手段となっているわけです。ですから、この小説をたんに陰謀小説と規定し、歴史小説でないと見たケステンの見解は、修正される必要がありそうです。この小説は、フランス王アンリ四世のユマニスムに託して、作者ハインリヒ・マンが自らの理想を語ると同時に、彼独自の手法で、主人公が生きた時代であるルネッサンスを描いた小説であると規定する方が、より正確であると思われます。な

ぜなら、ルネッサンス的人間は、ハインリヒ・マンが、創作の時期によって扱い方は違っていましたが、強い関心を示した対象だったからです。無論若き日のハインリヒ・マンが明るい、生の充溢の地と見てイタリアに共感をよせていたのが、いまメディチ家出身の二人の女性が代表するイタリア的要素が非人間的、怪物的に描かれているように、ルネッサンスもかつての彼の作品で肯定的な原理であったのとは違って、ここでは、手短かに言ってしまえば、アンリのユマニスムに対立する悪の原理と見られています。しかし、否定的に描写したから作品の中では二義的な意味しか与えられていないということにはなりません。この意味で、現在おこなわれている作品解釈がただ王を中心においた理想追求を描いた小説と見ているのは、片手落ちであると言わねばなりません。

「愛の小説」の構造

次に、ケステンの言う「愛の小説」の構造の検討に移ります。

王の相手をつとめた女性は生涯に五十人を越えたと伝えられておりますから、女に見境いがないところが王の弱点だったようです。ところが、ハインリヒ・マンは、王の失敗や逸脱を描きながらも、彼独特の解釈をほどこして、人を愛することをこの王の長所ともみなしております。愛は、王の人柄の偉大さとも欠点とも不可分に結びついているというわけです。

『青春』と『完成』の全体にわたって――四才の時百姓の女の子を張り合ったエピソードや、五才でルーヴル宮殿に行きマルゴに異性を意識した場面などは除くとしても、アンリが十八才の時の一夜の相手であった庭師の娘フルーレットの清楚な美からはじまって、晩年の王が十六才のシャルロット・ド・モンモランシーを追いまわ

して老醜をさらす姿まで――いろいろな愛や情事が描かれますが、そこでは、まず色とりどりの女性の魅力が讃えられていて、王にとっては人生の喜び、生き甲斐のすべては女性にあるかのようです。面白いことに、作者によれば、王はその際に、二三の例外を除けば、相手の女性を幸せにしたのであって、決して不幸にして捨てたのではなく、従って女の側でたいていは後々まで幸福な思い出を胸に抱きつづけているということになっています。王の方では、仕事の成果を捧げ、報告して喜びをともに分かつ女神の存在がつねに必要で、出会ったどの女性でもそのたびに崇拝していんぎんを尽し、女性を自分のなし遂げた仕事に当然与えられる報酬とみなしています。

まず、『青春』では、マルゴとの愛の消長が、きらびやかに、時には陰影に富んだ語り口で、物語られます。この女性は、美貌と古典の教養で知られた才女で、詩人でもあり、その『思い出の記』は、フランス文学史上に名をとどめていて、ハインリヒ・マン自身も小説の中でそれを引用しているほどですが、同時に政争の犠牲者であり、ヴァロア朝末期の頽廃を一身に体現しているような人物で、二十三人の愛人を遍歴したと言われています。彼女の生涯を簡単に紹介しておきますと、はじめアンリ・ド・ギーズの愛人であったのが、同い年のアンリ・ド・ナヴァルと結婚させられ、母が仕組んだ大虐殺のあと夫とは一時敵同士になってしまいます。のちに南フランスにアンリを訪ねて行き、仲直りをしますが結局世継ぎに恵まれず、アンリがマルゴの侍女フォスーズに手をつけて女の子を生ませたため、ルーヴルに帰って王弟ダランソン（のちにダンジュー）と語らって国王アンリ三世にそむく陰謀をたくらんで失敗し、以後ずっとユッソンの城に閉じこめられてしまいます。彼女は、ガブリエル・デストレの子供たちに贈り物をしたりして保身をはかりますが、アンリ四世が身分の低いガブリエルと結婚するために離婚を強行しようとしたときは、この誇り高い女性は頑として応じないで、ガブリエルが死ぬとあ

っさり承諾して、王は法王が離婚を承認したその日にマリ・ド・メディチと再婚します。それから約四年半後の一六〇五年マルゴ公妃は王と和解してパリに帰り、王から年金をもらってくらし、ルーヴル宮殿に晩年の王を訪ねたりしています。そして、王の暗殺の六年後の一六一五年、ドイツで三十年戦争がはじまる三年前に、このヴァロア王朝の最後の生き残りは、世を去ります。

『青春』では、彼女は、母が計画する大虐殺の陰謀を知って、母への愛情と夫のアンリへの愛情との相剋に悩みますが、結局計画を阻止するだけの強い意志はもっていません。また、アンリもマルゴもともに相手の愛人に対する嫉妬に苦しんでおり、この独特の女性は、アンリとの愛憎の歴史に沿って個性的に描かれています。

次に、『完成』では、王がもっとも幸せであった八年半にわたるガブリエルとの生活が中心を占め、王はこの時期には珍しく浮気をしませんし、（実際は、小説と違って、二、三人愛人があったと言われています）ガブリエルの方はひたすら王にすがって、有名な「いとしのガブリエル」の美しさと王が彼女によせたこまやかな愛情が、飽くことなく、くり返し描写されています。『完成』は、王の後半生約二十年を語っていますが、彼女との八年半の生活が主として語られる部分が六割にわたっている事実だけでも、『完成』でこの女性が占めている重要な位置がわかるというものです。

その他、『青春』では、ユグノーの軍隊を率いていたころの、「うるわしのコリザンド」と言われたグラモン伯爵夫人との十年間の交情であるとか、『完成』でガブリエル亡きあと王妃マリによって無事世継ぎの王子をもうける話や、その後愛人アンリエット・ダントラーグと悶着を起す話、さらには老境に入っての最後の恋人シャルロット・ド・モンモランシーなどが主なところで、他にもまだいろいろなアヴァンチュールがあります。愛こ

そは、王の活力の源泉なのですが、同時に最大の弱点でもあって、女性への愛が原因で陰謀に巻きこまれ、あるいは悲劇を招いた例が数多くあります。

聖バルトロメオの虐殺は、王子が太后カトリーヌとアンリ・ド・ギーズの危険を告げられ、軍を率いて一旦故国へ帰るよう警告されながら、マルゴの魅力にとりつかれてパリを離れなかったために避けられなくなったことになっていますし、その後のルーヴル宮殿での女官たちとの情事は、脱出の決意をにぶらせます。

また、粉屋の女房のところへ忍んで行った時には、ただ評判を落としただけでなく、亭主に見つかって危うく殺されかけますし、ガブリエル・デストレに一目惚れした彼は、家来のベルガルド公から彼女を奪い、シャルトル攻城戦の陣中にまでつれてゆき、しばしば自分の使命を忘れて軍事行動を遅らせ、ある時は嫉妬の念から公を殺せと命じて、あとで誤解に気づいて撤回したりします。（なお、このベルガルド公は、のちにサヴォア公国攻略戦の最中の王の代理となって、フィレンツェで結婚の契約式に立ち会います。）ガブリエルが謀殺されたあとでは、マリとの結婚話の最中にアンリエット・ダントラーグに惚れこんで、彼女が彼の愛に応じるのと交換条件で、もし六カ月以内に妊娠してその結果男の子が生まれた場合には結婚するという証文をわたしてしまって苦境に陥りますが、彼女が落雷に驚いて流産したために愁眉をひらきます。その後の彼女は、王を脅迫したり、王妃マリとルーヴル宮殿でいざこざをくり返すばかりか、スペインと通じた反乱の企てに親娘で加わって王を悩ませます。五十六才で凶刃に倒れた年には、アンリは、四十才も年下のシャルロット・ド・モンモランシーを追いまわして、そばに居させたいばかりに、縁つづきのコンデ親王と結婚させます。ところが、この二人は、結婚後ただちに国外に亡命して、反フランス勢力とむすんで王位をうかがい、王は、大いに体面を傷つけられた末に、断

念します。

しかし、そのような不幸や悲劇につながるとしても、女性を愛さずにはいられない王を、作者は、当然そうあってしかるべきことのように肯定しておりますし、そればかりか、民衆の娘を愛することは、すなわち民衆を愛することだという一見奇抜な主張もたびたび出てきます。

王が炭焼きの女房と恋に陥り、二十年後にその炭焼きを貴族にとりたてたエピソードのところでは、こう書かれています。「つまり、女性というものが彼を民衆にもっとも近づけてくれるからである。彼は、女性のうちに民衆を認める。女性によって民衆を所有し、民衆に感謝する。[8]」

また、二十年後に王が粉屋夫婦を訪れて酒をくみ交わす場面のところには、こうあります。「彼（粉屋ミショー）は、信頼をこめた目差しで王を見つめ、王にむかって陽気に（女にやさしい王様の歌を）歌って聞かせる。王が庶民を愛しておられ、だから庶民の娘みんなをいつくしんでおられることが、粉屋にはよく分かっているのだ。[9]」

『完成』のあちこちで、王が偉大である理由に考察が加えられ、「偉大さ」の問題は副次的テーマの一つだと言えますが、彼が偉大であるのは、彼が民衆を愛しているからだとしばしば強調されていますから、彼の女性への愛が彼の人間愛と表裏一体の関係にあるのだとすると、女性への愛なしには彼の偉大さは成り立たないということになります。このへんの事情は、彼の最大の敵手だったスペイン王フェリペ二世の描写から窺うことができます。フェリペ二世が登場するのは一度だけですが、作者の意図は明白です。この王は、残酷な異端審問とオランダ独立運動の弾圧で知られた陰険な専制君主というイメージに合わせて、アンリの明るい人間愛に対立する悪

役にされています。ここでのフェリペ二世の特徴は、アンリ四世とは反対に人間憎悪で、彼は聴罪司祭にむかって、次のように告白します。「私は、手や足のようなつまらないものを使わずに、この机から世界帝国を支配してきた。わたしの精神だけに世界は服従を誓ったのだ。わたしの意志が、団子をこねるように、世界の形を変えたのだ。[10]」「わたしの精神と意志がすべてをなしとげたのだ。だから、わたしは、人間の肉に属することなく、肉に手をふれることなしに、世界帝国を支配したのだ。[11]」

人間の肉体を軽蔑して、天使の純潔さを保っている自分は神にもっとも近いのだと豪語する彼は、一方では、「わたしは、なにものであるのか。諸民族は、わたしのガレー船の漕ぎ手にされてしまった。それでは、わたしはなんだ？囚人だ。喜びもなく、肉もなしに…[12]」と口走る孤独な老人です。そして、マドリッドの有名な娼婦を王宮の窓から一目見て、不意に欲望を覚えた彼は、たった一度の接触によって性病に感染し、それがもとでやがて死にます。最後は、彼が風刺小説でしばしば用い、『青春』ではアンリ・ド・ギーズや神聖同盟などの描写に見られたグロテスクに誇張した戯画化で終わるわけで、これは、歴史小説の側面から見ると小説の統一を損う要因ですが、それはそれとして、ここでフェリペ二世に与えられた性格をハインリヒ・マンの『アンリ四世』に先行する諸作品との関連で見ると、次の二つのことが指摘できます。

その第一は、フェリペ二世は、『ヴェニスに死す』でトーマス・マンが、主人公の禁欲的な作家グスタフ・アッシェンバハを規定したLeistungsethiker（業績の倫理家）に属するタイプ、より正確に言えばこのタイプの変形に属するものだということです。次には、第一とも少し関連するのですが、ハインリヒ・マンの作品に出てくる主要な人物たちの場合、男女間に幸福な愛が成就することはきわめてまれな例外に属し、たいていの登場人物

にはなんらかの理由で人を愛する能力が欠けていて、その愛は不幸な結末を迎えるということです。まず「業績の倫理家」について言えば、初期のマン兄弟は、しばしば同じ問題を扱っていて、ハインリヒもある時期にアッシュンバハや、あるいは『フィオレンツァ』に出てくるロレンツォ・デ・メディチ（太后カトリーヌの曽祖父）やサヴォナローラと同じ型に属する芸術家を作品の中心に据えますが、やがてこのタイプは、たとえばサヴォナローラに見られる孤独と人間的不幸、禁欲と生への敵意という要素が強調されて否定的に描かれはじめ、これに批判的に対立する存在として人間愛をとなえる芸術家、知識人のタイプが登場してきます。彼のエッセイに即して言えば、フローベールの芸術至上主義を不毛と見て、「芸術は、生に奉仕しなければならない」と言ったジョルジュ・サンドやゾラなどの方向が重要になってきて、そこからドイツの現状を否定し行動主義を唱えだした彼がトーマス・マンに『非政治的人間の考察』で批判されることになるわけですが、「業績の倫理家」の否定的なヴァリエーションとして、唯美主義芸術家と同一視されて暴君が登場します。そこでは、暴君の支配欲（または芸術家の名誉欲）は生との疎隔に苦しむものが抱く、生に対する復讐心にほかならないという、元来ニーチェの影響に根ざす心理主義で暴君の内面のいかがわしさが解釈されます。さらに、この暴君に対して、圧制を批判し、人間愛の精神に共感する知識人を配して、ドイツ帝国批判、「臣下」批判を行い、生対芸術、または生対精神であった彼の二元論は、権力対精神に変わってゆきます。第二点の愛との関連を見ると、小説中の唯美主義芸術家の場合も、暴君の場合も、生との断絶は、主人公が女を愛することができない、女も彼のことなどに関心を示さないので、彼は孤独で人間的に不幸だということが示される――この形をとる場合が多数を占めています。

例を一、二あげますと、『フィオレンツァ』と同年に出た短篇『ピッポ・スパーノ』では、詩人マリオ・マル

ヴォルトは、「喜劇役者」であって、「人間」を演じているに過ぎないと自分自身を規定し、「芸術」によって「生」を支配し、「生」に復讐しようと考える一方、「そこへは道が通じていない」「生」に所属したい、すなわち「人間」の女を愛したいとひそかに憧れますが、それが不可能なことを知っています。ところが、思いがけず彼のもとに望みどおりの女が現れて彼に愛を告白したとき、彼は、愛を芸術と両立させることができないで、破滅を余儀なくされます。

また、三年後に発表された『暴君』の主人公である、ルネッサンス時代のイタリアの都市国家の独裁者を思わせる孤独な王は、やはり女を愛することができません。この王の極端な人間蔑視と権力への執着の原因は、彼が弱い人間であって、愛に飢えていながら人を愛することができないからだとされています。この「暴君」がフェリペ二世によく似ていることは、言うまでもないことです。

一方、暴君の「権力」に対抗するものとして出てきた「精神」の側はどうかと言うと、これがまた、幸福な愛とはおよそ無縁なことになっています。

この時期の彼のエッセイ『精神と行動』（一〇年）、『ゾラ論』（一五年）、『帝国と共和国』（一九年）『理性の独裁』（二三年）等の、ドイツの現状分析としては面白いけれども、現実の政治的プログラムだと見れば実行不可能な、観念的な行動主義に照応するかのように、小説中のインテリは、体制側の悪を批判する知性を、具体的な「行動」にむすびつけることができないで、悪しき現実の前に敗北しますが、彼らもまた愛を貫くことができないのです。

たとえば、『臣下』（一四年）では、リューベックをモデルにした町ネッツイヒで、皇帝ヴィルヘルム二世の大

事業にご協力申し上げるという大義名分のもとに「臣下」ヘスリングたちが、一八四八年の闘士であった町の名士老ブックに対して背信行為に出て、そのため老ブックは、ヘスリングのもくろみどおり、事業家としても政治家としても大打撃を受けて失脚して失意のうちに死に、「臣下」ヘスリングは、自分の工場と家庭では暴君ぶりを発揮して町の大立物にのしあがってゆきます。ところで、老ブックの息子のヴォルフガング・ブックこそは、本来ヘスリングに対抗すべき人物で、皇帝支配下の帝国でなにが進行しているかを正確に見抜いていますが、彼は、むしろそのすぐれた知性ゆえに、かえって無為のうちに日を送る傍観者にとどまり、その彼は、貧しい愛人を捨てたヘスリングに、みすみす婚約者を奪われてしまいます。ヴォルフガングがわずかに「演劇」にのみ情熱を燃やす「俳優」であったことは、彼が「生」を演じる「喜劇役者」であった詩人マリオ・マルヴォルトの同類である証拠だと言えるようです。

『頭』（二五年）で死刑廃止を唱え、貧民の味方であろうとして結局は無力な、理想主義者テラも、あまりにも内省的な性格のゆえに大臣ラナスの娘アリスへの愛に踏みきることができず、娼婦のリリに慰めを見出しています。アリスの方は、権力に憧れて、テラとの愛よりは、これも権力志向の強いトルレーベンとの結婚を選びますし、テラの友人の、政界で出世するマンゴルフも、栄達の野心のために、テラの妹の女優レアを捨てます。

人間愛の精神、あるいは人間不信といっても、それらは決して抽象的な観念だけのものではなく、女を愛することにそのあらわれが見られるというわけで、これが後年の、民衆の娘を愛するアンリは民衆を愛しているのだという主張に発展したものと思われます。小説で「権力」を握る人物に否定的特徴をもたせるのは当然としても、「精神」の側にも、『帝国』三部作にいたってもなお、愛を貫く強さがなくて、「弱者」の詩人マルヴォルト

と同質の矛盾を抱えていて、その人間愛は不完全なものです。ハインリヒ・マンは、「強い」「ルネッサンス的人間」に共感することをやめ、「唯美主義」と「暴君」に背を向けて「行動主義」を唱えはしたものの、行動するユマニストの造型にはなお成功していません。

小説『アンリ四世』は、全篇にわたって愛の種々相が物語られていて、まさしく「愛の小説」と呼ぶにふさわしい作品だと言わねばなりませんが、ここでの愛のいわば豊饒さと先行する諸作品における愛の貧困との対照は驚くべきものです。いや、豊饒と貧困と言うよりは、愛の形態を比較するべきであるのかも知れません。『アンリ四世』では、男女間の平凡な幸福の成立する経緯が共感をこめて克明に物語られ（代表的なのはアンリとガブリエルの愛）、さまざまな女性の魅力が描写されますが、このようなことは、ハインリヒ・マンの他の作品ではほとんど見られませんでした。すなわち、作者の興味は、愛が成立しない局面の方に向けられることが多く、愛が問題になる場合は、不毛な愛、すれ違い、打算による結びつきなどの形をとり、これにしばしば陰謀がからみます。女性は、男の愛情にこたえるよりは、その強い生命力で男を滅ぼしてしまうマノン・レスコーの型が多く、権力や成功への野心は男をしのいで、往々にしてほとんど怪物の域に近く、美しくはあっても、魅力的というにはほど遠い存在です。（このタイプは、『アンリ四世』ではメディチ家出身のふたりの王妃となってなお名残りをとどめています。）内的には不具者の男と巨大な情熱や我執の持主である女というのが、ハインリヒ・マンどのみの配置でした。

ところが、王アンリ四世は、愛する能力に秀でていて、彼が経験する愛の喜びが何回も語られるわけですが、彼をめぐって登場するのは、往年の、特定の観念を代表させられた感じが否めない怪物めいた女性などではなく

て、ごくふつうの女性たち、あるいは、愛の場面では平凡な女に返っている女性たちで、それだからこそ彼女らはそれぞれに魅力的なのです。

一方、王の人間愛の理想は、過激な主張や現実離れのした空想ではなくて、国内の反対勢力もつぎつぎと味方に引き入れながら、流民に定職を与え、「日曜には鶏を鍋で煮る」生活を可能にするという具体的な形で、民衆を幸福にしてゆきます。異常な愛ではなくて、女性の魅力と平凡な愛を讃えることによって、作者は、王自身が幸福をもとめ、生きる喜びを満喫し、別離に涙する人間であるからこそ、民衆を愛し、幸福にすることができるのだと暗示しているようです。その王が、女性たちとの関連では、同様に平凡な人間だとされていることが、注意を惹きます。すなわち、女性としての魅力と王への献身を除くと、精神的には凡庸な人物に過ぎないガブリエル・デストレは、王を身近に観察しえた結果、彼のことが全然偉大な人物とは見えず、見通しと決断力に乏しい点で凡人以下だとさえ考えます。[13] しかし、他方この王が戦場では常勝の指揮官で、政治家としても有能であることが示されています。つまり、この王には、自分自身の愛や幸福、あるいは家臣たちとの信頼関係のような人間的な次元では、偉大なところや特殊なところはなにもないというわけで、その平凡さを作者は望ましい姿だと見ているのです。

この王の前身だとも言えるテラ（『頭』の主人公）は、指導者は平凡な人物の方がいいと考えます。

「人類の運命を決定したほんものの指導者は、みんな精神的には平凡な人間だった。反対の例はない。また、それでよいのだ。すなわち、凡庸な人物はわれわれより人間的に行動するからだ。平凡な人間を指導者にしておけば、人間には最悪の事態を最後になってなお免れられる見込みが少しできる。なによりも、平凡な人間たちは、

断乎として生の側に踏みとどまる。彼らは、精神的に高潔でないから、それができるのだ。[14]」

テラは、自分を非凡だと考えていて、しばしばその発言は大げさで奇矯に響きますが、関連ははっきりしています。自らの異常性に固執して人間を軽蔑するフェリペ二世よりは、愛や思いやりのゆえに失敗する、人間的には平凡なアンリ四世が望ましい指導者だということなのです。

ここで、話をようやくフェリペ二世の性格描写のところへ戻すことができます。アンリ四世対フェリペ二世という対立の型は、ハインリヒ・マンの作品にはかなり前からあって、そこでは人間を愛する前者のタイプが発育不全という趣きがあったのが、ここでは逆にフェリペ二世の方が、作者が解決ずみの問題を担わされているわけです。「民衆のすべての娘をいつくしむ」というアンリ四世と、娼婦とのただ一度の接触が死の原因になるフェリペ二世とを比較すれば、問題の所在はもはや明らかです。後者が世界帝国を維持した業績は、見ようによっては偉大なはずなのですが、作者の共感は、そこにはありません。この王は人を愛する能力がないから偉大ではないというのです。人間的でないものは偉大とは言えないというわけです。さらにくり返しを恐れずに蛇足をつけ加えておきますと、偉大さのありうる第三のタイプ、すなわち生の悲惨、卑小、醜悪、頽廃に超然と対立して苦もなく例外的、超人的に偉大でありうる存在――これは、ハインリヒ・マンの場合は「ルネッサンス的人間」だったわけですが――このタイプに貴族的な共感をよせるというのは、「業績の倫理家」を問題にしはじめたころから、ありえないことになってしまいます。そういった「放埒な」「強者」は、内面に弱さを抱えた「暴君」たちに変質してしまったのです。そして、「強さ」の問題は、『アンリ四世』にいたって、より柔軟な「偉大さ」の問題に変っています。

さて、偉大さが人間的なものであって、偉大であるためには愛がなくてはならないのだとすると、女性への愛は、人間愛の一つのあらわれだというのですから、王が時に愛ゆえの失態を演じ、悲劇をひき起すこともまたやむをえない必然的な結果だということになります。そして、誤りを犯す自分が不完全な人間であることを、だれよりもよく知っているのは、モンテーニュの教えに接したアンリ四世その人です。彼には、人間とは本来自他ともに不完全なのだという意識があって、だからこそ懐疑と寛容の精神が力説されるという構造になっています。ですから、王の考えでは、自分は、たまたま幸運にも戦場で倒れなかっただけで、偉大な人物などではなく、偉大さとは誤解以外のなにものでもない、ということになります。[15] ところが、この誤解を正してやって、気さくに振舞うと、民衆は、不機嫌になってしまいます。王が民衆に似ているということが再三強調されていて、兵士たちと同じものを飲み食いし、あるいは民衆と同じ言葉を話す場面がなんども出てきますが、民衆は、王がただ自分たちに似ているというだけでは満足しません。彼らは、自分たちを代表する王の偉大さを目のあたりにしてお祭り気分になり、自分たちが高められたかのような錯覚にひたりたいというわけで、王は、やむを得ず偉大な王様の役を演じ、儀式をとり行うことになります。

先にあげた『ピッポ・スパーノ』やそのころの他の作品では、これもニーチェの影響ですが、芸術家の創造行為は俳優の演技にたとえられ、その本質は、生命力の貧困に苦しみながら生命力の充溢を演じる詐欺師的行為とみなされ、従って、その創造行為に愛がないということが大きな特徴でしたが、ここでの王は、現実に偉大で生命力に溢れていながらも、自分が不完全であることを意識していて、無論同じく不完全である民衆の誤解に直面して、諦念と寛容と思いやりの気持から、偉大な王を演じます。だから、この演技は、詐欺師的行為ではなく

て、愛の行為なのです。作者は、モンテーニュから教わったペトロニウスの詩句 Totus mundus exercet histo-rionem.（全世界は俳優の役を演じる）を作中のライトモティーフのように深刻になりかけた時のアンリに何回も口ずさませて、王の諦念と寛容を表現しています。

『ピッポ・スパーノ』の詩人は、詩を書くためには行動することができず、なんらかの行動に出ると詩が作れませんでしたが、王アンリ四世については、「精神のために、彼は、つねに形式を尊重した。書簡や訓令や、のちに戦闘のさなかに歌わせることとなった歌などにおいて、彼は、すぐれた文章家であった。行動が大きさをますほど、文章はいよいよ精彩を帯びた。（中略）明晰な表現をなしうる人は、真の行為のなんたるかをわきまえているからである。」[16]とあり、ハインリヒ・マンの主人公たちが抱えていたジレンマは、ここに最終的な解決を見ることができました。（王が名文の手紙を多数残した事実を踏まえている。）

以上のように見てきますと、ハインリヒ・マンが王アンリ四世について語れば、必然的に愛について語らざるをえなくなるという事情がはっきりします。ここで王がさまざまな愛人たちとくり拡げる場面の多くは、作者の自由な虚構ではなく、いずれも典拠があって、ヨーロッパの読者にはお馴染みのものですから、奔放な愛情生活を送ったと伝えられるアンリ四世の生涯を語るとなれば、読者は、当然愛の諸場面をも期待することになります。そして、それらの愛の場面は、陰謀の場合と同じく、歴史小説の性格を強めるはたらきをしています。その証拠の一つとして、『アンリ四世』を現代小説だとしたコープマンにも、『完成』にとくに多く出てくる陰謀や愛は、それぞれに個性をもった登場人物たちが関与した歴史的一回性の事件という印象が強くて、それらを何回も起りうる Urbild にまで高められていると規定できなかった事実をあげておくべきでしょう。その愛と人間愛をむす

びつけたのは作者ごのみの趣向に過ぎないから採らないとする主張も可能であるかも知れませんが、多種多様な愛の描写は見事なもので、それ自体で小説の大きな魅力の一つとなっています。また、同時に『コリント前書』にある「たとい我もろもろの国人（くにびと）の言葉および御使（みつかい）の言葉を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く鐃鈸（ねうはち）の如し」の一句がくり返されるこの小説は、明るい人間愛と人間の可能性への信頼を語った小説ともなっています。なぜなら、アンリ四世は業半ばにして倒れましたが、その理想を現代に継承しうる人物はこれからも現れるはずだ、と作者はこの小説で主張しているからです。

ハインリヒ・マンがアンリ四世という素材に出会って作品の想を得たのは、先ほど申しましたように、一九二五年のことだとされています。しかし、すでに『ピッポ・スパーノ』から『頭』までの諸作品との比較がはっきりさせたものと思いますが、作者には一九二五年よりずっと以前から、作品成立の前史とも言える時期があって、それがこの素材との出会いを必然的なものとしていると言えるのです。小説『アンリ四世』は、彼のそれまでの六十数年の生涯の文字どおり総決算だったわけですが、この事実は、王アンリ四世の小説をたんにナチスの脅威が明らかになってから急拠構想された抵抗小説であるとか、三十年代の状況下での政治小説であるなどと規定してしまえば作品解釈の幅を狭めてしまうというわたしの主張を裏づけています。彼には、この王の寛容と人間愛に共感し、かつルネッサンス時代をべつの視点から描き出さずにはいられない理由があったのです。〔完〕

付記　本稿は、日本独文学会京都支部研究発表会（昭和五十六年六月十三日、於同志社大学）の席上口頭発表した『ハインリヒ・マンの〈アンリ四世〉の解釈と評価をめぐって』に加筆したものである。

〔注〕

1 拙論『ルカーチによる小説〈アンリ四世〉の解釈をめぐって』（「希土」九号、一九七九年、七―一九〇ページ）を参照されたい。

2 Helmut Koopmann: Der gute König und die böse Fee. Die Geschichte als Gegenwart in Heinrich Manns „Henri Quatre" In: Untersuchungen zur Literatur als Geschichte. Festschrift für Benno von Wiese. Hrsg. v. Vincent J. Günther u.a. Berlin 1973, S 522-544

3 Hanno König: Heinrich Mann. Dichter und Moralist. Tübingen 1972. かその代表的なものである。

4 Heinrich Mann: Die Jugend des Königs Henri Quatre. Roman. (Hamburg): Claassen 1959, S. 616

5 Hanno König: ibid , S 315ff

6 Hermann Kesten: Heinrich Mann und sein Henri Quatre. In: Maß und Wert, Jg. 2, 1939. S. 552-560

7 Thomas Mann – Heinrich Mann. Briefwechsel 1900-1949. Hrsg. u. eingel. v. Hans Wysling. Frankfurt a. M. 1969, S. 177

8 Heinrich Mann: Die Jugend des Königs Henri Quatre, S. 535

9 Heinrich Mann: ibid., S. 573

10 Heinrich Mann: Die Vollendung des Königs Henri Quatre. Roman. (Hamburg): Claassen 1959, S. 201

11 Heinrich Mann: ibid., S. 202

12 Heinrich Mann: ibid., S. 204-205

13 Heinrich Mann: Die Vollendung des Königs Henri Quatre, S. 541 ff.

14 Henrich Mann: Der Kopf. Roman. Berlin, Wien, Leipzig: Zsolnay 1925, S. 633 なお、この作品は戦後刊行されている。

15 Heinrich Mann: Die Vollendung des Königs Henri Quatre, S. 535 ff.

16 Heinrich Mann: ibid., S. 607

参考文献

本文で引用したものの他は省略した。アンリ四世時代のフランス史に関するもののみ挙げる。

Ernst Hinrichs: Fürstenlehre und politisches Handeln im Frankreich Heinrichs IV. — Untersuchungen in die politischen Denk- und Handlungsformen in Spätnumanismus. Göttingen 1969
Roland Mousnier: Die Ermordung des Königs. Berlin 1970
Leopold von Ranke: Französische Geschichte vornehmlich im sechzehnten und siebzehnten Jahrhundert. Leipzig 1868
E. A. Rheinhardt: Der große Herbst Heinrichs IV. Leipzig 1935
Saint-René Taillandier: Heinrich IV von Frankreich. München O. J.
渡辺一夫著作集　筑摩書房　三～五巻
渡辺一夫「戦国明暗二人妃」　中央公論社　一九七二年
同　「世間噺・後宮異聞——寵姫ガブリエル・デストレをめぐって」　筑摩書房　一九七五年
関根正雄「モンテーニュとその時代」　白水社　一九七六年
I・J・E・ニール「エリザベス女王」　(一)(二)　みすず書房　一九七五年
ジョルジュ・リヴェ「宗教戦争」　白水社（文庫ク・セ・ジュ）一九八〇年
ブラントーム「ダーム　ギャラント（艶婦伝）」　新潮社　一九五〇年
桐生　操「カトリーヌ・ド・メディシス——サン・バルテルミーの大虐殺」　栄光出版社　一九八一年
メリメ「シャルル九世年代記」　中央公論社　一九七一年
バルザック「カトリーヌ・ド・メディシス」　バルザック全集二十三巻、東京創元社　一九七五年
塩野七生「続・海の都の物語」　中央公論社　一九八一年
ブルクハルト（浅井訳）　ルーベンスの回想　二見書房　一九四三年
澁澤龍彦　毒薬の手帖　桃源社　一九七八年
同　世界悪女物語　桃源社　一九七八年

永井路子　歴史をさわがせた女たち　文藝春秋　一九七二年
五島　勉　ノストラダムスの大予言Ⅱ　小学館　一九八〇年
高階秀爾　歴史のなかの女たち――名画に秘められたその生涯　文藝春秋　一九七八年